

■ピラミードの保育空間をデザインする

～安心して遊べるように小さなコーナーに分ける～

一斉保育では、保育者の目は全体の子どもに行き渡りますが、子どもを管理することに注意が奪われ、教育的な効果は疑問視されています。また、幼稚園で行われている一斉的な教育プログラムの教育法では、小学校入学時の子どもの学力は、保育園（長時間保育）の子どもよりも高いという報告もありますが、その効果は数年で消えてしまう「仮眠効果」説もあります。

小さなグループによる指導では、担任の目が全体に行き渡らないが、担任が背を向けている子どもグループは、互いに教え合っている回数が多いのです。大きな集団では全体に平等にかかわる時間が多く、小さなグループでは個別的なかわりが増えます。

●子どもが自主的に遊びを選択できる保育室

どのコーナーで遊ぶのかを自分で選べるようなボードを使います。ピラミードは「プランボード」というボードを使っています。子どもは自分の判断で遊びを変えていけるので、一斉に保育を中断する必要がありません。また自分で決めた遊びなので、子どもはより遊びに入り込むことができます。

〈保育室の遊びの空間が絵で示され、自分のシンボルマークを絵の下に入れる〉



●子どもが安心するために、習慣やルールが見えるようにビジュアル化する

子どもにとって、時間や空間、ルールといった目に見えない概念は、なかなか理解しづらいものです。そこで、次に何をするのか、ここでは何をするのかなどを、目で見えるように準備してあげます。たとえば、

- ・服のたたみ方やトイレの仕方、一日の流れを絵で見せる。
- ・玄関からくつ箱までを、年中、年長ごとに色分けした足あとをつける。
- ・子ども一人ひとりに色や動物などのシンボルマークを決めて、くつ箱やロッカー、持ち物などに付ける。

など、日々の保育で子どもたちの様子を観察しながら改善していくとよいでしょう。



〈トイレの使い方がイラスト化され、子どもが安心してトイレを使える工夫です〉



〈一日の保育活動が視覚化され、数える数字も具体的に表示されています〉

●おもちゃや保育素材が目に見えるよう準備されている

おもちゃや素材はコーナーごとに分けておき、棚の置き場所に写真やイラストを用いるなどして、取り出しやすさを考えてあげましょう。おもちゃの置き場所を子どもに目に見えてわかりやすくし、日々の保育の中で置き場所や片づけのルールを説明していると、子どもたちはルールを理解して自然と片づけができるようになります。



●保育者と子どもの愛着形成を意識する

コーナーを作ることで、子ども一人ひとりにかけられる時間が長く持てます。一斉に伝えなければならないときは、部屋の中央に保育者と子どもが円を描くように座って話をします。このためには、部屋の真ん中にある程度の空間が必要です。この空間は、遊びの空間としても活用できます。このように、保育者と子どもが1対1、1対多のいずれにも対応できるデザインにします。



■入園・進級時の子どもの不安を取り除く受け入れ方

子どもたちは毎朝親と別れることに強い不安感を抱いています。保護者とうまく分離できる子どももいれば、分離に苦しむ子どももいます。保育者の仕事は、このような子どもの分離不安を解消してあげて、子どもが安心して保育室に入れるよう励ますことです。

子どもに声をかける、抱きかかえて安心させる、さらに保育室にいろいろな遊びがあることを目に見えるようデザインしてあげるなど、ピラミーデの保育室は子どもに安心感を与えることを大事にしたデザインです。



〈玄関先に遊びが用意されている
ドイツのピラミーデ保育園〉

■安心感の獲得は自己選択と自己決定の基礎

ピラミーデは、安心感の獲得が重要だと考えます。安心、安定した精神状態にいるからこそ、主体的に遊べるからです。不安な子どもは、指示されないと遊びません。

子どもが「わからなければ、保育者がそばに来てくれる」「いまは他の子のそばにいるけれど、自分のことを気にかけてくれている」といった安心感を持つために、ピラミーデが提唱する保育方法論が“ニアネスとディスタンス”であり、その根底にあるのが“愛着”です。

また、それぞれの子どもに適したおもちゃが用意されていることも、安心感を与えます。おもちゃの棚の下段には、子どもが簡単に使えるおもちゃが、上段になるほど使用にむづかしいおもちゃが置かれコード化と呼んでいます。



〈登園してきた乳児が安心して遊べる保育環境〉

■具体的な実践例

●登園時

その子のシンボルマークをさまざまなところに貼ることは、子どもの分離不安を解消するよい方法です。靴箱やカバン置きにマークがあると、保育室に自分の居場所があることが確認できます。また、登園のしるしに自分のシールを張るボードがあると、保育室に入りやすくなります。

●子どもの表現を引き出す

子どもは、自分が体験したことがあることしか話しません。そこで、子どもへの声かけは、子どもの体験にもとづいた話をします。映像でも、保育者は子どもが体験したであろうことを想像しながら

子どもは、親と別れる不安と同時に、好奇心も抱いて登園します。そこで、玄関にその月のプロジェクトのテーマに基づく飾りやディスプレイを子どもの興味を引き出すように展示してあげるとよいでしょう。

ら話しかけています。すると子どもは喜んでみずから話します。子どもとの会話はここから始まります。これはニアネスの実践です。

登園時の分離不安をやわらげるために、ピラミデは保護者がしばらく保育室にいることを認めています。とくに1、2歳の子どもや入園してしばらくの間は、親がそばにいることをすすめています。この方法は日本でも取り入れはじめています。わが子が他の子といっしょに遊ぶ場面を見ることで、保護者の子ども理解や保育への理解をうながす効果もあります。



〈分担して働くオランダのワークシェアリング制度は、夫婦共に働く家庭において、夫婦のどちらかが在宅する日が多いために、保護者が子どもの送迎後に10時ごろまで保育室にいます。〉

●登園後しばらくしても不安なとき

不安感が長く続く子どもは、ひざに乗せたり横に座らせたり、遊びを手伝ったりして、身体的に寄り添います。また、不安感がぬぐえない子どもを無理に遊びに誘うことはせず、子ども自身が変わることをゆっくり待っています。



〈安定した環境といつも同じ先生が相手をしてくれるという安心感があってこそ、他の子どもへの意識が芽生えてきます。仲間意識が育つと、保育室での安心感も高まります。〉

●遊びの意欲を引き出す

保育の大きな目標の一つは、子どものやる気を大事にして子どもが自主的に遊べる環境を整えることです。しかし、遊びを子どもの好き放題に任せると、幼児期のあいまいな知識では子どもが混乱する恐れもあります。一方、子どもは自分の遊びが受け入れられないと、強い不満を持ったまま一日を過ごします。こうした課題を解決するには、まず子どもの遊びを認めて、どのような援助をすることが適切かを判断することです。「子どもが自主的に遊ぶ」という意味は、子どもの好き放題に遊ばせることではなく、適切な援助の下で遊びが展開されることを意味しています。

